

第二回 ITP-EUROPA 国際セミナー参加報告書

石田聖子（東京外国語大学リサーチフェロー）

2012年11月22～24日にヒルデスハイム大学で開催された第二回 ITP-EUROPA 国際セミナー“Kultur im Spiegel der Wissenschaften (学術の鏡に映る文化)”に発表者のひとりとして参加した。2009年秋から約二年にわたり ITP-EUROPA の支援のもとで研究活動をつづけてきた報告者にとり、ITP-EUROPA 主催の国際セミナーに参加するのは、2010年12月にボローニャ大学で開催された第一回セミナーに引き続き二度目となる。ただ、ボローニャに拠を置いての博士論文執筆中に参加した前回と異なり、今回は、ITP の支援を得て本学とボローニャ大学間で締結された共同学位授与制度のもとでの研究活動をすでに終了し両大学から博士号を取得した身での参加となった。したがって、今回は、支援のもとで得た学術的成果を感謝の思いを込めて発表することのできる機会として前々から楽しみに準備を進めてきた。

セミナー二日目 23日午後の“イタリア、日本、ドイツの文学、映画、演劇”をめぐる討議する第一セッションに配された報告者の研究発表のタイトルは「Cesare Zavattini dall'umorismo al cinema, ovvero due mezzi per il pensiero per sintesi/The humour and the cinema: Cesare Zavattini's two methods for the synthetical thought (ユーモアと映画 —チェーザレ・ザヴァッティニによる統合的思考のためのふたつの方法)」で、博士論文最終章である第四章第三節の一部から直接的な想を得たものである。映像に深く関わりながら博士論文では実際の映像を挿入することがかなわず残念に思っていた箇所であるため、今回の発表では映像を交えた構成を考えた。

発表の概要は以下の通りである。ジャーナリズム、文学、映画、絵画等あらゆる分野を通じあらゆるメディアを駆使してチェーザレ・ザヴァッティニ（ルツァーラ、1902年～ローマ、1989年）が追求したのは統合的思考の表現であった。本発表では、ザヴァッティニにより統合的思考の表現に適した手段として選ばとられた映画の美学的射程と成果を検討することを目的とする。1930年代にユーモア作家として活躍したザヴァッティニは1940年代に入ると映画領域での活動を本格的に開始する。作家自身が繰り返し述べる通り、1940年代以降ザヴァッティニにより映画が主要な表現手段として選ばとられた経緯には、ザヴァッティニが幼少時より好んで鑑賞したヴァラエティーショー、とりわけレオポルド・フレーゴリ（Leopoldo Fregoli）の舞台の影響を色濃くみることができる。19世紀末から20世紀初頭にかけて早変わり芸人としてイタリア内外で比類ない人気を誇ったフレーゴリは、反面で、映画誕生最初期よりその有効性を確信しリュミエール兄弟の直弟子となった後イタリアで映画の普及と活用法の開発に努めた。実際に、1898年以降のフレーゴリの舞台は、早変わり芸を中心とする舞台でのイリュージョンナンバーに引き続きその舞台裏を映した映像の上映がおこなわれていたことが知られている。そうしたフレーゴリの“総合的な”舞台にザヴァッティニはふたつの可能性（多元的現実表現の可能性・身体拡張の可能性）を見出した。ザヴァッティニにより映画は、事物の全体と部分とその相互関連性を明るみに出すことで現実の両面（リアル／バーチャル）を並行的に示すことができ、また、イリュージョナルな効果を介することで唯一的な人間身体でさえも様々に拡張することを可能にする装置として用いられる。ザヴァッティニによる映画作品とは、したがって、本来的に幻影でありまた現実でもある映像を通じた様々なレベルの現実が渾然と融合するような全的現実の表現の試みといえる。こうした現実認識および映画詩学こそはザヴァッティニのユーモア、ネオレアリズモの異端として知られる映画作品『ミラノの奇蹟』（1951年、ヴィットーリオ・デ・シーカ監督、チェーザレ・ザヴァッティニ原案・脚本）、また、1950年代以降に手がけられた“Non-film”シリーズを考えるに肝要となると考える。

今回の発表に関して反省点は数多い。なかでも、制限時間を大幅に超過したという事情こそあるも

の発表後にひとつも質問が出なかったことは大いに反省すべき点だと考えている。今後、ITPの支援を受けて得た個人的研究成果を還元してゆくにあたり、ひとりよがりにならないこと、聴衆の関心を引き付けるばかりでなく問いをかき立てるような表現をおこなってゆくことは重要である。研究内容はもちろん発表の方法についても大いに見直す必要があると思われる。

そうした意味でも、またそれ以外の観点からみても、使用言語も研究領域も異なるなかで各人が工夫して発表をおこなった今回のセミナーは報告者にとり示唆深いものとなった。できるだけ英語を介すことなく多言語を用いておこなうという今回のセミナーの在りかたは間違いなく特異であり、第一回セミナーよりも参加者も使用言語の数も大幅に増えた今回のセミナーが果たしてどのような場となるかは開催前には報告者自身にとっても容易には想像のつかないものであった。準備段階でドイツで開催されるセミナーでイタリア語を発表言語に用いることに不安を感じたこともたしかである。実際に、セミナー中、言語を共有しないことからコミュニケーションがスムーズにおこなわれなかったこともあった。セミナー総括時に ITP-EUROPA 成田委員長が示唆してくださった通り、この意欲的なセミナーの意義を通常的な方法や言語で評価することはたしかに容易ではないと思われる。しかし、一見して脈絡のないナンバーを身一つですべておこなうことで他の“ヴァラエティー”ショーにはない一貫性を演出したフレゴリの舞台に象徴されるように、関心を共有する人間がひとつの場に居合わせることでこのセミナーがひとつのクリエイティブな場となったことには間違いのないことは報告者自身の強い実感である。

最後に、今回のセミナーに参加の機会を与えてくださった ITP の関係者の方々、セミナー開催に尽力してくださったすべてのの方々、セミナー中にお世話になった参加者の皆さまに心からの感謝を申し上げます。